

子どもの不登校経験にみる母親の心理変容過程 —中年期女性に焦点を当てて—

人間発達教育
教育コミュニケーション
学籍番号 M16008F
氏名 曲 五月

【1.問題と目的】

本研究の目的は、子どもの不登校経験をした母親の心理変容過程を分析し、母親にとっての不登校にどんな意味づけをしたのかを描き出すことである。

母親が、子どもの不登校を経験することでどんな不安や悩み、苦痛、不満を抱えていたのか。そして、不登校にどのように向き合い、受け止め乗り越えていったのであろうか。また、子どもという他者を受け入れることで母親は、どう変化していったのか。子どもだけでなく夫、その他の家族、学校、地域の人々のような他者との関係性にはどんな変化があったのか。そして、そこから母親は新しい価値観や自己を生成したのだろうか。母親の語りから心理変容を分析する中で、それらを検討していきたい。今まで十分に扱われていなかった母親の心理過程を克明に描くことで、今も悩み葛藤している母親や子供への有効なアセスメントや支援に繋げたい。このことが社会的な問題となっている不登校問題の打開策の一つになればと考える。

では、母親はどんなふうに変化するのであろうか。インタビュー前の変化の観点を設けた。
観点1) 他者との向き合い方はどのように変わったのか。

観点2) 母親の内省が進み、どのような新しい視点や価値観を生み出したのか。

ここでは対話的なインタビューを行い、母親が

自己のとらえ直しの語りをすることで、どんな自己(私)がいたのかを浮き彫りにする。それはどんな意味をもっているのか明らかにしていく。

【2.研究方法】

母親3名にインタビューを半構造化面接による対話形式に行った。インタビューは、平成29年8月～9月にかけて、1人につき3回、各回の間は1～2週間ほどあけて1回1時間～1時間半程度行った。語りの内容は、ICレコーダーに録音し、逐語録にした。分析は、母親のエピソードに着目し、どういう経験からどんな私が見られたのかを浮かび上がらせることを目的として行った。

【3.分析結果】

(1) 母親Aの特徴と心の変容

<プロフィール>60歳パート勤務、不登校経験者は長男、不登校期間は中学1,2年と高校1年
<特徴>

①[家族の多重役割]を担っていた。家族の中で、妻、母親、3人の介護を一手に引き受けていた。家族のケアの主責任者のプレッシャーは重く、加えて子どもの不登校と向き合うことになる。

②[子どもの二度目の不登校]高校に入学し、半年後に不登校になる。母親は、2度目のショックは大きかったが、親子共に早い立ち直りであった。

<心の変容>

観点1: 母親は、「自分自身を認められない人をわかって」としており、相手を認めることの大切さを理解する私が存在していた。

観点2：母親にとって子どもの不登校は、不登校を通して「時代の流れの中で新しい考えをもつ」ことの価値観を得ていた。

(2) 母親Bの特徴と心の変容

<プロフィール>59歳パート勤務、不登校経験者は長女、長男、不登校期間は長女・高1年後半～2年、長男・中2～3年

<特徴>

①学歴へのこだわり：学校に行くことはあきらめていたが、高卒の資格を得るという学歴補の価値観は捨てることができなかった。

<心の変容>

観点1：今まで人に対してもっていた偏った見方を変え「多様な生き方をしている人を認められる」価値観に変わった。夫とは葛藤後、「あてにしない」ことで、あきらめた。

観点2：子どもの不登校をきっかけに「親の会」に参加する。そこで共感できる同士と信頼できる先生に出会い、気づかされる。「価値観をおしつけない」という新しい視点をもつ。

3) 母親Cの特徴と心の変容

<プロフィール>62歳専業主婦、不登校経験者は長男、不登校期間は中学1～3年

<特徴>

①いじめ；子どもがいじめの不登校経験であった。意識は対学校になるので、内省に向かいにくい。いじめは自己の振り返りができないほど壮絶な体験である。

②子どもを護る母親：学校の対応への不信感で、不登校を選択する。母親のアイデンティティをもつ。

<心の変容>

観点1：母親は、子どもの命が危険なことがわかり、学校へいくことをやめさせる。そのときに、子どもという他者を受け入れたのではない

かと思われる。

観点2：母親は、子どもが学校に行くことや勉強することよりも「命が大事」という価値観を選び、学校に行かない選択をした。

【4.総合考察】

<母親にとっての子どもの不登校>

子どもの不登校という危機を経験したことで、観点1) 3人とも子どもを受け入れ、他者を認めることで新しい関係を築いていた。観点2) 3人ともにそれぞれが新しい価値観が生成されたことが確認された。また、3人ともその時々の経験におけるエピソードから「そこで見られる私」が複数存在していたことが明らかになった。

<あきらめというプロセス>

「あきらめ」という言葉の意味には「対象を断念する中でその痛みや思慕の情に折り合いがついていくという意味」がある(大橋, 2008)。

母親たちは、子どもを学校に行かすことをあきらめたり、学校の対応をあきらめたり、夫の協力をあきらめたりしていた。あきらめには、対象を自分の中で受け止め、折り合いをつけることが必要だと思われる。

<不登校の親の会>

母親たちの心理変容のきっかけは親の会で語り合い自己を主張できる居場所に出会えたことであった。母親Bは親の会での出会いにより新しい価値観が生成されたことがわかった。

<不登校を支えた家族の問題>

不登校の子どもにとって安心、信頼できる家族がいることは改善に向けて重要な役割を果たしていくものだと思われる。

主任指導教員 中間 玲子

指導教員 中間 玲子